

第1章 わかやまの大地と気象



気象



気候区

県内では、紀北地方が瀬戸内気候区に、紀南地方が南海気候区にあたります。

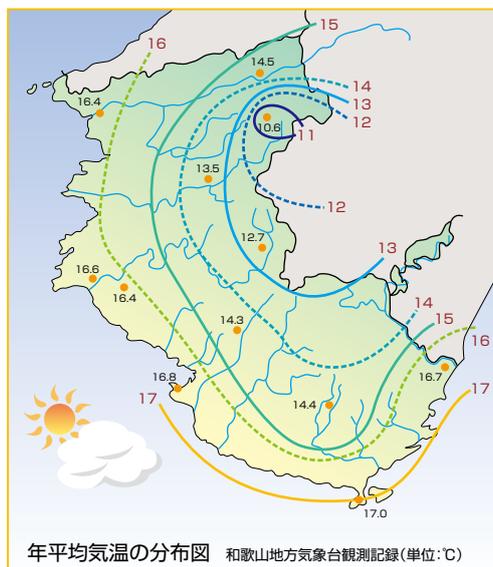
瀬戸内海沿岸の地方を中心とした瀬戸内気候区は、雨が少なく晴れの日が多いため蒸発がさかんで、乾燥した気候になっています。

南海気候区は温暖で、最も寒い日でも山間部をのぞくと日平均気温が6℃以上あり、梅雨や台風の季節には雨が多く、年降水量は2,000mm以上もあります。この気候区は、関東から九州にかけての太平洋沿岸の地方にあたり、湿り気の多い海洋性気候になっています。

平均気温

1年間の平均気温は、和歌山市で16.4℃、潮岬で17.0℃となっています。潮岬では、8月の平均気温が和歌山市よりも1.3℃低く、反対に1月は2.0℃も高くなっています。したがって、紀南地方の海岸部では、夏は涼しく、冬は暖かいといえます。一方、高野山では、1月の平均気温はマイナス0.5℃で、8月の気温は和歌山市の6月ごろとほぼ同じ22.3℃です。

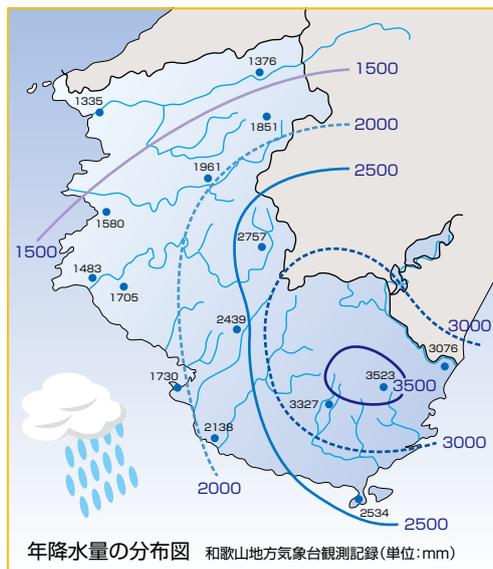
和歌山県では、山間部よりも海岸に近いほど、また、北部よりも南部にいくほど平均気温が高くなっています。



降水量

1年間の降水量が2,000mm以上のところを多雨地域といい、沿岸部ではすさみ町より南の地域が、北部では標高500m以上の山間部がこの地域にあたります。

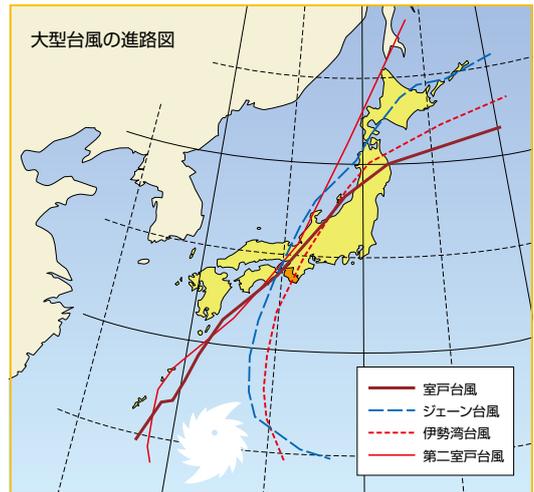
県内で年降水量の最も多い地域是那智勝浦町の色川で、年によっては4,000mmにもなり、全国的にみてもたいへん雨の多いところですが、一方、紀ノ川沿いの地域は、年降水量が1,500mm以下になることが多く、雨の少ない地域といえます。和歌山では、降水量の多い月は、梅雨の6月と台風が多い9月で、降水量の少ない月は冬の12月と1月です。



台風

和歌山県では、これまで台風による大きな災害を何回も経験してきました。これは、紀伊半島が台風の通り道になっているためです。平均すると毎年1回は、台風の接近や上陸による被害を受けています。1889（明治22）年8月の台風では、1,247人の犠牲者が出ています。また、室戸台風（1934〔昭和9〕年9月）、第二室戸台風（1961〔昭和36〕年9月）などは、特に大きな災害をもたらしました。

ジェーン台風（1950〔昭和25〕年9月）や第二室戸台風のように、台風が四国の室戸岬から紀伊水道を北東に進むと、和歌山県が台風の進路の右側にあたるため、特に風雨が強くなります。また、台風の接近と満潮が重なると、沿岸部では高潮の被害を受けることもあります。



ジェーン台風の様子（和歌山市）



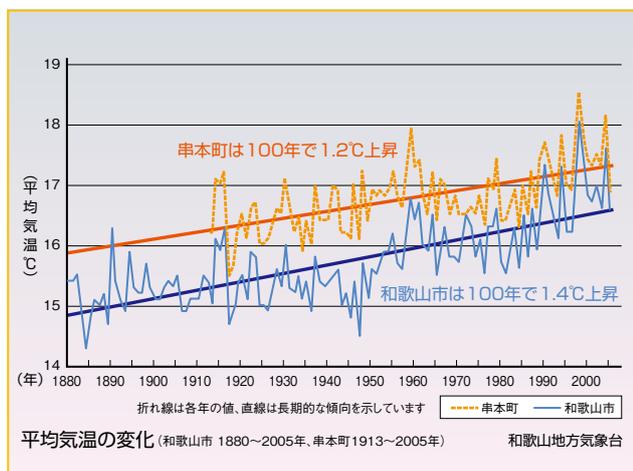
7.18水害の山くずれできた天然ダム（かつらぎ町花園地区）

集中豪雨

限られた地域で短時間に集中して降る大雨を「集中豪雨」といい、梅雨や秋雨のころにしばしば起こります。1953（昭和28）年7月17日の夜から18日の早朝にかけて、梅雨前線が県内を南北に行ったり来たりしたために、有田川や日高川の上流で24時間に500mm以上もの雨が降りました。山間部では各所で山くずれが起り、川に流れ込んだ土砂と雨水は濁流となってあふれ、有田川や日高川、貴志川の流域などに大きな被害をもたらしました。この「7・18水害」ともよばれる集中豪雨で、命を失った人が約1,000人、流されたり壊れた家が約9,000戸、流されたり埋まった水田が約4,600haにもものぼりました。

地球温暖化

地表から放出される赤外線が、大気中の水蒸気や二酸化炭素、メタンなどに吸収され、その熱が再び地表を暖める現象を「温室効果」といいます。また、化石燃料の大量消費などによって、大気中の二酸化炭素などの量が増え、気温が上昇することを「地球温暖化」といいます。



近年、和歌山県でも、図から明らかなように気温の上昇がみられます。この上昇は、経済活動などでエネルギー消費が多くなった1960年代と1990年代に大きく上昇していることから、やはり地球温暖化の影響が考えられます。私たちにできる身近なところから、エネルギー消費を減らす努力が大切です。